# 細川三斎忠興筆『徒然草』について

萩原　義雄

2006.10.17 ～ 2008.10.14 更新

## 『徒然草』伝本系統

『徒然草』本文系統は、①烏丸本系統・②細川幽齋本系統・③正徹本系統・④常縁本系統の四種が知られる。このなかで、②の系統本は、幽齋・三齋・妙庵の細川家が独自に伝えた系統本であることが明らかとなってきている。いま、この一本である三齋自筆の室町時代書写された資料を取り上げてみることにする。

### 書き出し序段冒頭文、

烏丸本『徒然草』〔慶長一八年（一五一四）、古活字板〕

つれ〴〵なるまゝに。日くらし。／すゞりにむかひて。心にうつりゆくよしなし事を、そこハかとなく。書／つくれバ、あやしうこそものぐるお／しけれ。いでや此世にむまれてハねが／としている。

嵯峨本『徒然草』



つれ〴〵なるまゝに。日くらし。すゝりに／むかひて心にうつり行よしなし事をそこ／はかとなくかきつくれはあやしうこそ／物くるおしけれ。いてや此世に生れては／ねかハしかるへき事こそおほかめれ。／

正徹本『徒然草』〔永享三年（一四三一）、正徹写〕

つれ〴〵なるまゝに日くらしすゝりにむかひて／心にうつりゆくよしなしことをそこハかとなく／かきつくれハあやしうこそ物くるおしけれ／いてやこの世にむまれいてハねかハしかるへき／

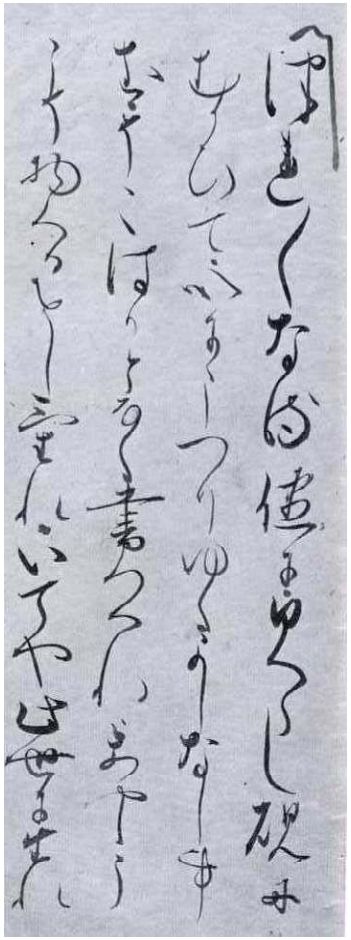
陽明文庫本『徒然草』

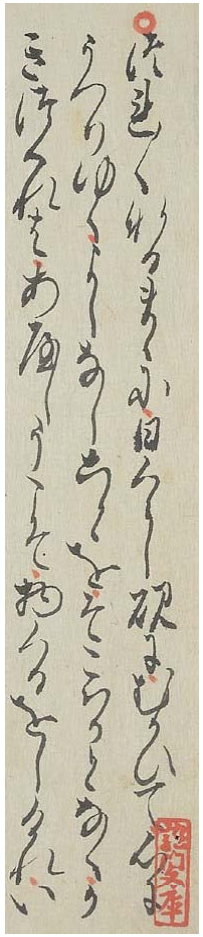
つれ〴〵なるまゝに日くらし硯にむかひて心にうつり／ゆくよしなしことをそこはかとなくかきつくれはあや／しうこそ物くるをしけれといでやこ乃世に生れては／

細川家永青文庫本『徒然草』〔三齋写〕

つれ〴〵なる儘に。日くらし硯に／むかひて。心にうつりゆくよしなし事／を。そこはかとなく。書つくれハ。あやしう／こそ物くるをしけれ。いてや此世に生れ／てハ。ねかハしかるへき事こそ。

おほかりめれ。御／門乃御位ハ。いともかしこし。竹の園生の／末葉まて。人間のたねならぬそ。や／む事なき。一乃人の御ありさまハ







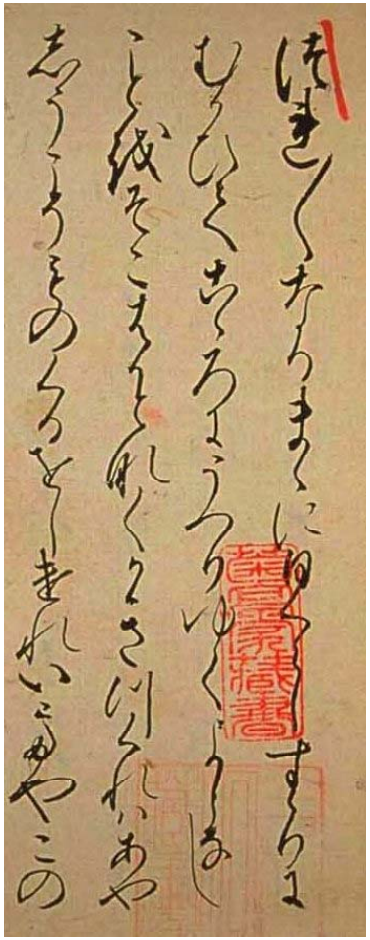
となっている。

このように、書写された資料を比較してみると、文字の書き様はそれぞれ異なっていることが見えてこよう。通常、現代の私たちは、これらの底本を校訂研究者が活字翻刻したもので見ていることが多いのではなかろうか。ひとつひとつ、写本にあたって見ることは余り成されないのが学習一般となってきてしまっている。この学習の風潮は、一度定まると揺るぎない時を経過して、これらの資料を眺めようとはしなくなっていくようである。

ここでは、最初に記載したように、細川家永青文庫所蔵の一本である「奥書：此の徒然草上下貳冊者／細川越中守忠興之遺墨／無嫌疑者也予應人之求／於是乎跋／　延寶四年　法橋牛菴／應鐘下旬随世〔押印〕」を例に検討してみることにしよう。

漢字と平仮名との混淆文の作品資料だが、漢字表記の語彙を見るに、中国の文献そして、本邦王朝の古典作品群を引用することが多々見えている。

○ふミハ、文選のあハれなる巻々。白氏文集。老子乃ことは。南花の篇。〔上巻13オ④～⑥〕



○古今集の中乃哥くつとかや〔上巻14オ②〕

○源氏の物語には。物とはなしにとそ書る〔上巻14オ⑧〕

○新古今には。のこる松さへ。峯にさひし／きといへる哥をそいふなるハ。〔上巻14ウ①〕

○梁塵秘抄乃郢曲の言葉こそ。亦

あハれなる事ハおほかめれ。〔上巻15オ④⑤〕
○いひつゝくれハ、みな源氏物語。枕草紙なとに。ことふりにたれ／と。おなし事又今更いハしとにもあらす。〔上巻19ウ①②〕
○沅湘日夜。東流去。愁人の為に。留事しハらく時もせすといへる詩を見侍りしこそ。あハれなりしか。嵇康も山／澤にあそひて。魚鳥をミれハ。心たの／しふといへり。〔上巻22ウ〕
○堀河院の百首の哥の中に。／ むかしミしいもか垣ねハあれにけりつはなましりのすミれ乃ミして。さひし／きけしき。さる事侍けむ。〔上巻26オ⑧～27ウ③〕
○長月ハかりに。梅のつくり枝に。／雉を付けて。君かためにと折花ハ時／しもわかぬといへる事。伊勢物語に見えたり。〔上巻64ウ⑧～65オ①〕
●生活人事。伎能学問等の諸縁を止めよとこそ。摩／訶止観にも侍れ。〔上巻73ウ⑤⑥〕
◎或者小野道風の書る。和漢朗詠集とてもちたりけるを。ある人御相傳。うける／事にハ侍らしなれとも。四條大納言撰せら／れたる物を。道風かゝん事。時代やた／かひ侍らん。おほつかなくこそといひけれハ。さらへハこそ。世にありかたき物には侍りけれ／とて。いよ〳〵秘蔵しけり。〔上巻83オ③〕
○たうときひしりの。いひをきける事を／かき付けて。一言芳談とかや。名付たる。／草子を見侍りしに。〔上巻90ウ③〕
○ふるき哥のこと葉かきに。かれたるあふひにさして。つかはしける／とも侍り。枕さうしにも。こしかた乃こひし／きもの。かれたるあふひとかけるこそ。いミし／うなつかしうおもひよりたれ。鴨長明が四／季の物語にも。玉たれに後のあふひハ／とまりけりとそかける。をのれとかるゝた／にこそあるを。なこりなくいかゝとりすつへき。〔下巻8オ③④〕



旧字体と新字体両用表記

「佛」と「仏」

「佛」

○佛の御おしへに。〔上巻2オ⑤〕
○灌佛乃ころ。〔上巻18ウ⑥〕
○持佛堂に仏のおほき。〔上巻69オ④〕
○あまた／のわつらひにならハ。佛事の妨に侍へしと／いひさためて。二人河原へ出あひて。心ゆく／ハかりにつらぬきあひて。ともにしにゝけり。〔上巻106ウ②〕
○人にをくれて。四十九日の。佛事に。／あるひしりを請し侍しに、説法いみしく／して。皆人涙をなかしけり。〔上巻113オ⑧〕

「仏」

○仏につかふまつる〔上巻16オ⑧〕
○経仏なといミて。なかこ。そめ帋／なといふなるもおかし。〔上巻24ウ⑥〕
○ある人法然上人に。念仏乃時。睡にを／かされて。行をおこたり侍る事。いかゝ／して。此さハりをやめ侍らんと申／けれハ。目乃さめたらん程。念仏し給／へとこたへられける。いとたうとかりけり。〔上巻37オ⑦～37ウ④〕
○亦うたはひなからも念／仏すれハ、往生すともいハれけり。
○持佛堂に仏のおほき。〔上巻69オ⑤〕

○かくハ／いへと。仏神乃奇特。権者の傳記。さのミ信せさるへきにもあらす。〔上巻71オ⑦〕
○一 仏道を願ふといふハ。別の事なし。いとま／ある身に成て。世の事を心にかけぬを第一乃道とす。〔上巻91オ⑥〕
○宿河原といふ處にて。ほろ〳〵おほくあ／つまりて。九品の念仏を申けるに。外より入来るほろ〳〵の。この御中にいろおし／房と申。ほろやおハしますと。尋けれハ。〔上巻105ウ⑤〕
○世を／すてたるに似て。我執ふかく、仏道をね／かふに似て。闘諍をことゝとす。〔上巻106ウ⑧〕
○是法々師ハ。浄土宗にはちすといへとも。／学生をたてす。たゝ明くれ念仏して。やすらかに世をすくすありさま。いと／あらまほし。〔上巻113オ⑤〕

「京」の俗字表記「京」
○京極殿。法成寺なと見るこそ。／心さしとゝまり。事変しにけるさまハあハれなれ。〔上巻25ウ⑤〕
○そ乃ころ廿日計、日ごとに、京・白河／の人。鬼見にとて出まとふ。〔上巻46ウ⑥〕
○手をひき。つえ／をつかせて。京なるくすしの。かりゐて／行けり。道すから人のあやしミ見る／事かきりなし。〔上巻50ウ③〕
○坊を百貫にうりて。彼是三万疋を芋／かしらのあしとさためて。京なる人に預け／置て。十貫つゝ取よせて。いもかしら／をともしからすめしける程に。〔上巻59オ⑥〕
○宇治に住侍りけるをのこ。京に具覚房とて。／なまめきたる遁世乃僧を。こしうとなり／けれハ、常に申しむつひびけり。〔上巻81オ⑥〕

○高野のせうくう上人。京へのほりけるに。／ほそ道にて。馬にのりたる女乃行あひ／たりけるか。くちひきける男。あしく／ひきて。ひしりの馬を。堀へ落して／けり。〔上巻96オ⑧〕
○京極入道中納言ハ。猶ひとへ梅をなむ。軒ちかくうへられたりける。京極乃屋の南向きに。／今も二本侍めり。〔下巻9ウ④⑥〕

「舩」→「舟」
○もろこし舩のたやす／からぬ道に。無用乃物ともの／ミとりつミて。ところせくわたしもてくる。いとおろか／なり。〔上巻109ウ④〕

「あした」と「ゆふへ」【朝夕】テウセキ・あさゆふ
○夕にいねて。朝にをく。〔上巻72オ①〕
○道を学する人。夕／にハ朝あらん事をおもひ。朝には夕あ／らん事をおもひて。重てねんころに修／せん事を期す。〔上巻87オ②〕

「にほひ」【匂】
○心にくう。／火ハあなたにほのかなれと。物のきら／なと見えて／俄にしもあらぬ匂ひ。い／となつかしう住なしたり。〔94ウ③〕

「ミゾウ」【未曽】→【未曽有】

○かくのことくの優婆夷なと／の身にて。比丘を堀へけ入さする。未曽の／悪行也といひけれは。口ひき乃男。いかに／仰らるゝやらん。えこそ聞ゝしらねといふに。／上人、猶いきまきて。何といふに。非修非／学の男とあらゝかにいひて。きはまり／なき放言しつと思ひけるけしきにて／馬ひきかへして。にけられにけり。〔上巻97オ①〕

※並列語

○もし人来りて。我命あすハ／必失なはるへしと。告知らせたらんに。今／日の暮る間。何事をかたのミ。何事をか／いとなまん。我らかいけるけふの日なんそ。その時節にことならん。一日乃うちに。飲／食。便利。睡眠。言語。行歩。やん事／をゑすして。おほく乃時を失ふ。〔上巻100ウ①②〕

梵字漢字

○しら梵志と申者也。をのれ／か師。なにかしと申しし人。東國にて。いろ／おしと申。ほろに殺されけりと承しかハ。／そ乃人にあひ奉りて、恨申さハやと思ひて。尋ね申也といふ。〔上巻106オ①〕

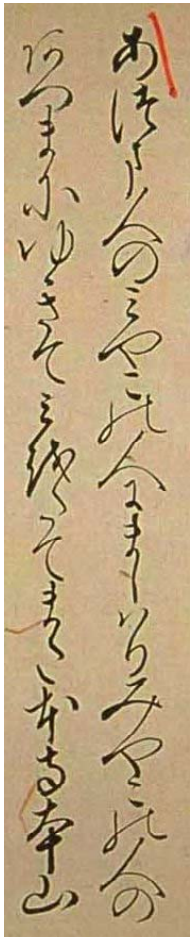
○近き世に。ほろんし・梵志漢字なと。いひける者。そ乃始也けるとかや。〔上巻106ウ⑥〕

「あつま」【東・吾妻】

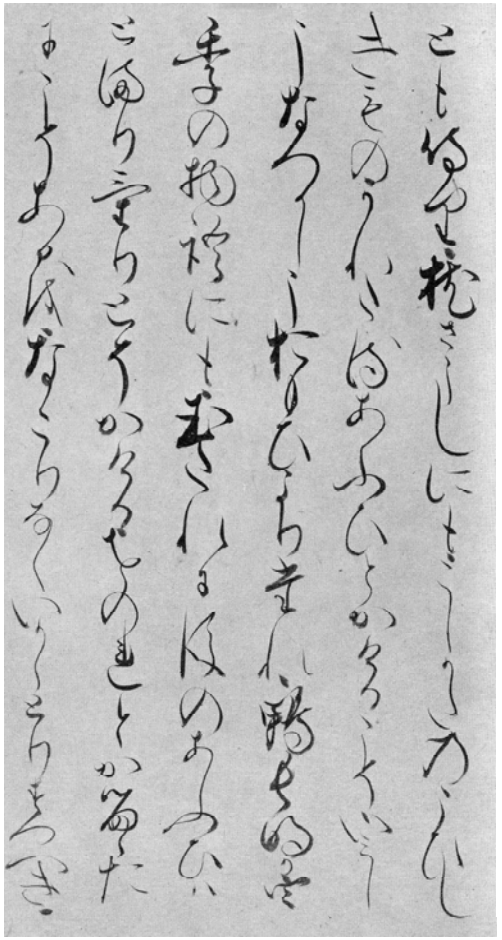
あつま乃人の都にましハり。都の／人の東に行て身を立て。亦本寺。本山／を。はなれぬる。〔下巻27オ⑥〕

この三齋本は「あづま」の地名語を最初のところでは「あつま」と平仮名で表記し、次の処では、「東」と漢字で表記する。





この同じ箇所を他写本と比較してみると、両方とも平仮名書きにした龍門文庫藏『徒然草』写本には、平仮名の字母を以てシメスと「安徒万」と「阿川末」と別種の仮名字母を用いて表記していて、書記者自身が字体の変化を保たしていることが分明である。このことは、龍門文庫本の同行の「ミやこ」と「みやこ」、「本寺本山」の「ホン」の文字にも表出しているので、ご納得いただけよう。

※上巻の箇所及び下巻の一部を以て、ここに抜粋記載してみましたが、下巻の部分も今後ご自身で学習率先してお調べいただけると宜しいのではないだろうか……。

《学習用》